

Dental

magazine

デンタルマガジン
VOL. 193

Summer 2025

ISSN 0915-0064

Dental Talk

“タキノ歯科流” Er:YAGレーザー活用法
瀧野 裕行×村井 結衣



Dental Talk

Signoが40年にわたって愛される理由
倉本 仁×青羽 俊×日比野 徹×佐藤 弘多



Topics

Creator's Interview

内科医として、歌手として、2つのフィールドで生きる選択
アン・サリー×長縄 拓哉



MDSCレポート

DX化に対応可能な
デジタルラボを院内に新設 <第1回>

静岡県榛原郡
医療法人社団L&S
鈴木歯科医院
理事長 鈴木 敏雄

前号のMDSCレポートでは、デジタル環境を前提にした歯科医院構築やデジタルラボについてご紹介しました。(デンタルマガジン192号 P82-83参照)

このたび、デジタルラボ構想に賛同いただき、導入準備を進めておられる鈴木敏雄理事長と、MDSCでIOSトレーニングを受講されたスタッフの方々にお話を伺いました。

— デジタルラボ新設を決断されるまでの経緯をお聞かせください

当初は新たにメンテナンス棟を増設し、口腔内スキャナー(IOS)を積極的に活用することで治療精度や診療効率の向上を目指すだけの計画でした。その計画をモリタの方に相談したところ、MDSC(Morita Digital Solution Center)の片野所長を紹介いただいたんです。片野所長からは、モリタが推奨するデジタルクリニック構想に関する説明がありました。その話の中で、増設を検討されているのであれば、院内にデジタルラボを併設し、歯科技工士を新たに採用してはどうかという提

案がありました。もともと私にも、技工物を外注するよりは、顔の見える歯科技工士とコミュニケーションを密に取りながら進めたいという考えがありました。確かに初期投資は必要ですが、技工物の内製化が軌道に乗れば、安定した収益が見込めるだけでなく、技工期間の短縮や患者満足度の向上、スタッフ間の連携強化など、数多くのメリットがあることに気づかされました。

— これまでラボにはどんなイメージをもっておられましたか

粉塵や有毒ガスが部屋に舞っていて、あまり良い作業環境とはいえない印象でした。しかし、片野所長の説明や、東京・御茶ノ水にあるDental Plaza Tokyo内のデジタルラボを実際に見学して、「これからの歯科技工はこんなふうに進化し、変わっていくんだな」と考えを新たにしました。それと同時に「この機会にぜひデジタルラボの導入を前向きに考えたい」と思うようになりましたね。

— MDSCではIOSのトレーニングを受けられましたね

IOSのトレーニングは主にスキャン業務を担う歯科衛生士に受講してもらって、私はオブザーバーとして参加しました。やはり新しいツールは年齢が若いほど吸収が早いですし、すぐに上達しますね。トレーニングはスタッフ全員に受けてもらうことで、同じ方法で、同じレベルでスキャンできるようになります。そうしてまず基準を決め、それをスタッフ全員で共有できたことは大きな成果だと感じています。

— デジタルラボ導入に関して、悩まれたところはありましたか

将来的な医院展開をどう考えていくかという部分ですね。5年後、10年後に医院がどうなっていたいか、そのビジョンを持ったうえで、必要なツールなのか、今導入した方がいいのか、その見極めは理事長として悩んだところです。ただ、歯科技工士の確保が今後難しくなってくることは明らかです。また、IOSや3Dプリンターも今



リニューアルが完了した外観。右側の建物がメンテナンス棟。



メンテナンス棟の内部。通路を挟んで右側が予防診療室、左側にデジタルラボと消毒・滅菌エリアがある。



予防診療室の様子。IOSは現在CEREC2台、iTero1台を活用している。

のうちに導入して使い方をマスターしておいた方が将来的にも良いだろうという判断から、最終的にデジタルラボ導入を判断しました。

私1人では何もできませんから、スタッフの理解と協力の姿勢にはいつも

感謝しています。またディーラーやモリタの方の献身的なサポートがなければ実現できなかったと思います。デジタルラボは、まだ部屋ができただけで、今後器材の設置や新たに入職する歯科技工士のトレーニングなど、やるべき

ことは山積みです。理事長としてクリニックの歩むべき道を見定めながら、支えてくれるスタッフやサポートして下さる皆さんとともに、着実に歩を進めていきたいと考えています。

IOSトレーニングを受講した歯科衛生士さんにお話を伺いました。



歯科衛生士 久保 歩惟/福世 百夏

— IOSトレーニング前の状況について教えてください

久保 当院に勤務して10年目です。IOSは当院に導入された2018年から使っています。現在は、新患の方が来院されたら必ずiTeroで口腔内をスキャンしますし、CAD/CAMインレーやチタン冠などもすべてCERECで印象を採りますから、近いうちIOSの奪い合いになりそうな状況です。唾液が多い傾向があるお子さんや開口量の少

ない患者さんのスキャンが特に難しいと感じています。部位としては、第二大臼歯の遠心から頬側にかけてがとても難しいです。手の動かし方によってスキャンの精度が変わってくるので、慣れるまで時間がかかりました。

福世 昨年入職しました。衛生士学校ではIOSに関する授業がなく、当院で初めてIOSを使うようになりました。トレーニング前は、前歯の唇側部分など、部位によってうまくスキャンできないところがあって、かなり時間がかかってしまうことがありました。

— IOSトレーニングを受けてどんな変化がありましたか

久保 スキャンのスピードが上がったと感じています。知識がない状態で探りながらスキャンしていた時は、10



分近くかかることもありましたが、トレーニングを受けてから約5~6分まで短縮できたのではないかと思います。

福世 前歯や最後臼歯遠心部分のスキャンのコツも教えていただいたので、それを意識して実践するようになってからかなり早くなったと思います。

久保 片野所長から「ここをきちんとスキャンできていないと、後でこういうところで困りますよ」と指導いただいたことで、精密な記録として残すことがいかに大事かにも気づくことができました。

MDSC片野所長からひとこと

IOSを使用する際に共通認識を持たず、術者によってスキャンする順番や方法が違くと、データのクオリティが担保できないという問題が起こります。MDSCではそうした状況も視野に入れながら、医院様ごとの状況を把握し、パーソナルなトレーニングを組み立てていきます。

今後、鈴木歯科医院様では、歯科技工士が新たに加えることで、デジタルラボの本格的な稼働がスタートします。『デンタルマガジン』では引き続き鈴木歯科医院様の取り組みを追っていく予定です。今後デジタル化を目指す歯科医院様のご参考になれば幸いです。



器材搬入前のデジタルラボの様子。手前がノンパウダーエリア(クリーンエリア)で、奥に見える部屋がパウダーエリア。



パウダーエリアは、粉塵やガスを可能な限り閉じ込めて歯科技工士の身体的負担を軽減する機能も備えている。



ノンパウダーエリア(クリーンエリア)には、大型モニターを備えたCAD装置などが設置される予定。